

(博士論文要約)

戦後の東洋史学は、中国の皇帝制度の基礎をなす秦漢帝国が、いかにして皇帝支配を確立させたのか、またそれを可能とする皇帝権力はどのような構造であったかを解明することに傾注してきた。その際、西嶋定生氏をはじめとする諸家は「秦漢帝国」と秦と漢とを同質のものとして一括してきた。これを痛烈に批判した浅野裕一氏は、秦と漢とを区別し、なおかつ皇帝権力形成の問題と、権力成立後の皇帝支配の性格説明とを明確に論じ分けるべきであるとする。その上で浅野氏は、社会の諸階層のうち秦には存在しない封君である諸侯王と列侯に注目し、高祖の皇帝即位の経緯から封建制は漢帝国の形成原理であり不変の国家原理であり、漢の皇帝支配の性格を考える上で諸侯王との関係は除外することのできない前提条件とする。

本論文では、浅野氏の指摘を受けつつ、前漢前半期に留まる浅野氏の研究を発展させ、漢代を通じた皇帝支配の特質を明らかにすることを試みる。その際、諸侯王を封建制における封君としてのみ見なすのではなく、皇帝に親しい宗室という側面も重視する。彼らは、皇帝に代わりうる素質を有しており、それは皇帝の後嗣が途絶えたときのスペアということもあれば、実力で帝位を奪う篡奪者ということもあり得、そうした長短の性格を併せ持つ宗室を抑えてコントロール下に置くことは皇帝権力の形成と安定に直結するからである。同様の視点から、后妃もこれに加えて帝室と総称することにし、漢代帝室のあり方の分析を通じて、漢の皇帝権力の形成過程とその支配の特質を明らかにしていく。

考察の結果、浅野氏の指摘の如く皇帝権力形成の問題と、権力成立後の皇帝支配の性格説明とをわけて言えば、帝室から見た漢代史は三期に区分することができる。第一期が漢初から武帝元狩年間頃であり、この時期に帝室はほぼコントロール下に置かれ、皇帝権力形成期とすることができる。第二期は後漢初までで、故事・古制の対立を通じて皇后はその権威を確立し、諸侯王は皇帝支配の中に定位され理念を形成しつつある時期である。第三期は後漢章帝期以降で、帝室の基本的あり方は変わらないものの、儒教の浸透を背景として若干の修正が行われ、皇帝による生母や伯叔父・兄弟への孝悌の実践も見られる時期である。

このように、漢は秦が「子弟を匹夫と為」したこととは対照的に、一貫して「親親尊尊」を以て帝室に臨み、皇帝に親しいほど尊いとすることで皇帝を中心とする爵制的秩序を帝室の中で形成していた。皇帝権力の形成期においては、外にあって強大な諸侯王に比較して親しい后妃を格上げし、皇帝権力が成立し諸侯王が内に取り込まれたならば、彼らは皇子・宗室としての性格を強くして皇帝に親しい存在として遇される。のち、その基準の修正や儒教的脚色が加えられることもあったが、帝室は皇帝中心の秩序形成のなかで高い地

位にあり続けたのである。

こうした帝室のあり方は、この後も修正されながらも継承されていくから、後世から見ると特徴的なものではないかもしれない。例えば、皇太后の称号、皇子を王とすること、傍系皇帝の生母のあり方等は、後世では当たり前となったものもある。しかし、それらも決して皇帝制度に本来的に備わっていたものではない。「古典的国制」と称せられる他の諸制度と同じく、帝室のあり方も漢代のうちに固まり継承されていったのであり、本論文はその形成過程を跡づけたものである。